深川勝三監督作品

睦

睦聾唖映画演劇研究会製作

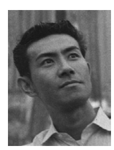
ろう監督が自らキャメラを回し演出した、昭和を生きたろう者のドラマ

あらすじ　父親のクリーニング屋を手伝っていたろう青年は、家庭不和の暮らしがいやになり、父親の許可を得て北海道を飛び出し、東京へ向かった。
　憧れの東京で、田舎者とバカにされた青年は有り金をはたいて服や靴を買う。都会人だと見栄をはり歩いていた彼は、通りかかりの男に足を踏まれる。
　そこにいた靴磨きの若い女性が青年を手招きした。彼女はろう者だった。青年はお代と共に木彫り熊のキーホルダーを彼女に渡した。その後、青年は運命の渦に巻き込まれていく。奇縁そして家族間の葛藤、青春、昭和時代のろう者の自立と成長を描く。

解　説　第4作「三浦浩翁半生記・完結編」が完成し、次のステップとして新たに制作を進めたのが「たき火」でした。昭和38年10月「たき火」制作発表、昭和41年にスタート。しかし深川監督の度重なる入退院により、クランクアップは昭和47年頃。制作発表から約10 年の歳月が経っていました。その後の懸命な療養も虚しく、撮了から13年の闘病生活の末、昭和60年に深川監督はこの世を去りました。「たき火」のフィルムは手付かずのままでした。
　深川監督が率いた「睦聾啞映画演劇研究会」のメンバーが 「『たき火』に日の目を」と、おおだて監督に再編集を委託しました。しかし、「たき火」の脚本はありませんでした。残っていなかったのではありません。なんと深川監督は頭の中で構成し自ら指揮していたのです。かつての出演者も77歳（編集当時）を超える高齢で、彼らのわずかな記憶を頼りに、おおだて監督が編集作業にあたりました。当時のゆっくりしたテンポを現代の流れにマッチする様再構成してアクション性を高め、2時間以下に収まるようにしました。しかし、一部のフィルムが消失し、展開のタイミングをうまく生かせないというハプニングが度々あり、苦心と工夫の連続でした。
　東京都庁が有楽町にあったり、有名メーカーのロゴも今と違っていたり、交通、町並みなど失われた昭和時代の面影が映像の中に多く残っていました。一番の見どころは、深川監督本人が出演していること。柔らかくて滑らかな手話表現は今やあまり見かけません。彼の在りし日の姿、昭和時代のろう者の有り様が確認できます。ろう界としては、貴重な映像遺産と言うべき作品であるでしょう。

データ
原画：昭和47年（1972）制作　8ミリフィルム・モノクロ・サイレント
監督：深川 勝三
出演：高橋 重晴・深川勝三 他
製作：睦聾啞映画演劇研究会
編集：平成24年（2012）
脚色・編集：おおだて のぶひろ
監修：高 正次
上映時間：108分
上映媒体：デジタルビデオ（モノクロ）
　字幕スーパー付き

映画監督
深川（ふかがわ）　勝三（かつぞう）
（1924–1985）
東京都出身



第1回 3本目

サイン・オブ・シネマ

～手話で語り、映像で伝える映画～

当日券あります!!

2026年3月14日（土）16:00～18:00

15:30開場

石川県文教会館 1階ホール

協会会員:1,000円／非会員:1,300円

※賛助会員および石川県立ろう学校生徒は会員扱い。
※中学生以下無料／高校生1,000円／大学生以上1,300円

申込方法
deaf.ishikawa.soshiki@gmail.com
076-205-6025

主催：社会福祉法人石川県聴覚障害者協会